

末っ子

山本周五郎

青空文庫

一 彼に対する一族の評

祖父の（故）小出鈍翁は云った。

「平五か、そうさな、まあ悪くはあるまい、ばあさんが可愛がりすぎたから、少しあまつたれのようなだが、まあそう悪くはないだろう、すばしっこいところもあるし、いい養子のくちにでも当れば、案外あれで芽を出すかもしれない、そんなうまいくちはなかなかあるまいが、まあ、あれはあれでいいだろう」

祖母の（故）いち女は云った。

「あれはしつかりした子ですよ、敬さんや奎もくさんとはまるで性質が違います、上の二人よりもしつかり者です、おじいさんがあまやかすし、末っ子だからあれですけども、忪しんはしつかりした賢い子です、ええ、あたしは孫たちの中では平五がいちばん好きですね、まあ長い眼で見えていてごらんなさい、あの子はきつとずぬけた出世をしますよ」

父親の小出玄蕃げんぱは云う。

「あいつはどうもかんばしくない、親の口からこんなことを云いたくはないが、いつか家

名を傷つけるようなまねをするのではないかと危ぶまれる、第一に、あいつはこの父を尊敬していない、小さいじぶんからそうだ、一例をあげると、まだ赤ん坊のときだったが、さよう、生れて三十日も経ったころからだろう、あいつは私の顔を見るとべろを出した、そんな赤ん坊のことだからべつに意趣があつたわけではないだろう、偶然だろうと思つたのだが、どうもそうではないらしい、ほかの者にはしないのである、私の顔を見るとべろを出すので、いいところもちはしなかつた、こんなことは誰に話すわけにもいかない、妻にさえ話したことはないが、その当時の侮辱されたような気持はいまだに忘れることができないのである、その後ずつとあいつのすることを見てきたが、すべてがうわつ調子で、侍の子らしくない、七千二百石の旗本の子であるという自覚がない、誰も知らないだろうが、たとえば 饅頭まんじゅう のこと、古足袋や古肌着のこと、また道具屋のことなど、私はみんな知っているのである、じつに、なんと云いようもない、三河以来の由緒ある家柄を考え合せると、なんともなさげなくなるのである」

長兄の敬二郎が云う。

「あいつは末っ子のあまつたれだ、末っ子は三文安いというが、祖父や祖母にあまやかされたのでおまげが付いてしまった、あのままでは養子のくちがあつてもやれやしない、困

つたやつだ」

母親のいつ女は云う。

「あたしにはあの子の気持がわかりません、あれは気ごころの知れない子です、末っ子だからあまやかしてはいけないと思って、できるだけ気をつけて育てたつもりですけれどね、いいえ、乱暴でもないしだらしがないというんでもありません。きょうだいじゆうではないちばん利巧でしょう、親に口返しをしたためしもなく、はいはいとよく云うことをきくんです、けれどそれはおもてだけで、はらの中はどうも人を小ばかにしているように思えてなりません、学問はひじりぎか聖ひじりぎか坂へかよいましたし、武芸は道場が近いのでやぎゆう柳生さまでした、聖坂へはいまでも、ときどき日講を聞きにゆくようですが、どちらも成績はよかったです、ことによるとそんなことで慢心しているのかもしれない、お父さまや敬さんと気が合わないので、あいだに立つあたしは困るようなことがたびたびです、養子縁組のはなしも二度か三度ありましたが、敬さんが承知しないんですよ、いまのまままで養子などにやつたら小出の恥になるつていうんですの、それに本人もゆく気はないようです、もう二十四にもなるのにどうするつもりなのか、やつぱり末っ子なので、まだあまえた気持がぬけないのか、あたしにはわけがわかりません、本当にあれは気ごころの知れない子です」

長兄の妻はる女は云う。

「平五さんですか、さあ、わたくしよく存じあげませんのよ、主人の云うほどではないでしょうけれど、みなさん少し厳しすぎるのではないかと思えますけれど、でもわたくしにはよくわかりませんですわ、ええ、本当のところわたくしよく存じあげませんですよ」

次兄の（木下の養子）奎之助は云う。

「あいつは末っ子のあまつたれで、いくじなしのくせに向つ気が強くつて、へんにこすつからいところがあつていやなやつだ、ゆだんのならないおつちよちよいだ、おれはあいつの顔を見るといつもぼんのくぼが痒かゆくなつたものだ、いまから云つておくが、あいつはろくなやつにはならないぞ」

長姉の（土ひじかた方へ嫁した）よねは云う。

「平五さんは妙な子でした、あまつたれで、そのくせさせていて、少しも可愛げのない、きょうだいの情のうつらない子でした、土方の親類に婿縁組のはなしがあつて、いい縁だったのにあの子は断わつたのです、あのとときに土方も怒るしあたしもくやしゆうございましてが、いま考えてみるとそのほうがよかつたと思います、あの子が土方の一族になるなんて、いま思うとぞつとするくらいです、父や母がいまでもあの子に手を焼いているかと

思うと、本当に気の毒だと思えます」

次姉の（米良へ嫁した）くには云う。

「あのひとですか、そうねえ、末っ子だし、おばあさまが猫っ可愛がりに可愛がりましたから、ちよつとあまつたれなところもあるようだけれど、でも存外しっかりしているし、思い遣りの深いところもあつて、これは誰も知らないでしょうけれど、新庄の叔父さまなどにはときどき貢いでいるようですよ、うちでも主人がだいぶ鼻屑で、小出では平五がいちばん人間ができている、などと云つています、あたしはこんな暢気な性分ですし、あのひととは年も一つしか違いませんから、きようだいじゆうではいちばん仲もよく、喧嘩もした代りには、いまでもここへはよく遊びに来ます、あたしより米良に会うためかもしれないけれど、貯めたお金を預けているくらいですから、あたしのことも頼りにしているのだと思えますわ、ええ、いま養子のくちが一つあるんですよ、先方は小普請ですけど、五百石ばかりの内福なうちで、娘さんも温和しそうな縹織のいいひとなんです、どうして承知しないのか、あたしにはわかりません、先方ではぜひと云つてますし、米良もすめているんですけれどね、なにか考えがあるんでしょうか、どうしてもうんと云いませんのよ」

叔父（玄蕃の弟で新庄へ婿にいつている）主殿このもは云う。

「私は平五についてはなにも云えませんが、小出の兄があのとおりですから、ええ、小出の兄はできた人物ですし、私などはこんな貧乏ぐらしで、平五にもいろいろあれしてはいますけれど、しかし私にはなにも云えないです、兄がよく知っているでしょう、小出の兄は人物ですからね、ええ、私にはなにも云えないですよ」

二

その年は平五にとつていやな年であつた。今年は何年になりそうだぞ、と彼は思った。第一は正月の集まりに、次兄の奎之助とやりあつたことだ。毎年正月の六日に、親族の人たちが小出へ集まる。これは個別に年頭の回礼をする煩を省くため、以前は一年ごとにもちまわりだったが、八年まえに先代の鈍翁が亡くなつてから、いつとなく小出だけへ集まるようになった。

——おやじのばかげた虚栄心だ。

と平五は心の中で冷笑していた。親族の中心におさまること、かれらから「木挽町こびきちょうの

御本家」とよばれること、そして骨董こつどうじまんをするのがいい気持なのである。集まるのは十二人だったが、三年ほどまえから九人に減った。おやじの骨董じまんに閉口したのだらう、と平五は思っているが、今年はさらに減つて五人しか来なかつた。平河町の森内ないぜ膳ぜん。神谷町の木下杵之助。薬師小路の土方市之丞いちのじょう。田村小路の新庄主殿。それから榎えのき坂の米良平左衛門という顔ぶれであつた。

「おやおや、おまえまだいたのか、平五」

酒宴がなかばごろになつたとき、杵之助がそうよびかけた。平五より四つ上の二十八歳で、六年まえに木下へ養子にいつたが、うちにいるじぶんから平五とは仲が悪かつた。

平五は返辞をしなかつた。彼は席次のことではらをたてていた。新庄の叔父が末席にいるのを、誰もなんとも云わないのである。主殿というこの叔父は、父の一人きりの弟で、三十二三になつてから新庄へ養子にいつた。そんな年まで部屋住でいたのと、養子さきの新庄がひどく貧乏なためだらう、もともと引込み思案な人だつたが、みんなの集まるときは不必要にへりくだつて、いつも末席の隅のほうに小さくなつてゐる。平五はみかねて上座のほうへ直るように云い、ほかの者にもすすめられると、ようやく席を直すのだが、その日は平五のほかには誰もすすめる者がなかつた。長兄の敬二郎などは、平五に向つて、

「うるさいぞ」と云つたくらいである。

——なにがうるせえんだ、おめえにも叔父に当る人だぜ。
と平五ははらの中でどなつた。

——新庄がもつと金持ならへえこらおべつかを使うんだろう、ざまあみやがれ。

そして叔父の主殿に対してもはらがたつた。だらしのない人だ、そんなことだからみんなに軽蔑けいべつされるんだ、などと思ひ、ふくれた顔で膳の上の物を喰たべていた。

「おい平五」とまた柰之助が云つた、「おまえ耳がどうかしたのか」

「どうもしませんよ」

「じゃあおれの云つたことは聞えたんだらう」

「聞えましたね」

「聞えたのに返辞をしないのか」

「必要がないでしょう」と平五が答えた、「このとおり私はここにいるし、いることは誰の眼にだつて見えるんだから」

「おれが云うのはそんなことじゃない、養子の縁談があつたのに断つたというから、おまえになにか目算があるのだらうと思つていたところが、相変らずのそのそしているから

訊きいたんだ」と李之助が云った、「おまえもう二十五になるんじゃないか」

「二十四ですよ」

「来年は五になるさ、どうするんだ」と李之助が云った、「縁談のより好みなんかしていると、一生ひやめしを食うようなことになるぜ」

よけいなことを、と平五はかつとなつた。

「結構ですね」と平五はやり返した、「養子にいつても小遣に不自由したり、好きな酒も飲めずにちぢこまっているくらいなら、ひやめしを食つてるほうがましですよ」

李之助の顔色が変わつた。

なんだつて、それは誰のことをさすんだ、と李之助が云った。誰のことでもありません。譬たとえ話です、と平五が答えた。ごまかすな、いまのはおれへの当てつけだ、と李之助がいきりたち、つまらない応酬が始まつて、すると、向うから長兄がよせと云つた。

「黙れ平五、——」と敬二郎が云つた、「よそへいつたつて兄は兄だぞ、しようのないやつだ、あやまれ」

平五は黙つていた。

「あやまれ」と敬二郎が云つた、「あやまらないのか、平五」

そのとき米良平左衛門がとりなしにはいった。彼は敬二郎と同年の三十二歳だが、ふうぼ風貌も氣質もずっと老成しているし、親族の中では唯一人の平五の味方であった。ところでその平左衛門が、とりなすに事を欠いて、とんでもないことを云いだしたのである。

「もういいよ敬さん、そう叱りなさんな」と米良が云った、「貴方がたにはまだ末っ子のあまつたれとみえるのだろうか、平さんも二十四になったし、もう想いをかけた娘さえあるらしいからね」

平五は口をあき、それから狼狽ろうばいして、「米良さん」と遮さえぎったがまにあわず、森内膳がそれはいいと笑いだし、それにつられてみんなが笑った。父の玄蕃さえも笑って、ばかなやつだ、と云うのが聞え、平五は立つてそこから逃げだした。

三日ばかり経って、平五は榎坂の米良を訪ね、そのときのことをなじった。米良はにやにや笑って、あの手でなければ敬さんをそらせないと思つたのだ、と云った。

「氣に障つたら勘弁してくれ」と米良はあやまった、「しかし、そういう娘がいると話していたじゃないか」

「想いをかけたなんて云やあしません、或る店で二三度会つたと云つただけですよ」

「おやさうかしら」と姉のくおととにが良人のそばから云つた、「あのときの口ぶりだと、ずい

ぶん熱をあげているようだったことよ」

「そんなことがあるもんですか、それは思いちがいですよ、貴方がたまでがそんな」

「ばかに力をいれる」と米良がまたにやにやし、そして話をそらし、「——これから毎月一度、木挽町で寄合をすることになったのを知っているか」

「うちですか、知りませんね」

「毎月十日の晩だ、平さんが退却したあとできまつたんだよ」

こんどは平五が笑った、「そいつはお気の毒だな、おやじの骨董じまんをたつぷり聞かされるんでしょう」

「そうらしい、みんなもなにか一品ずつ持ち寄るということになった、つまりお互いに鑑識眼を高めようというわけさ」

平五は声をあげて笑った、「そいつはまるつきりお気の毒だ、おやじの講釈をたつぷり聞かされるだけですぜ、みんな承知したんですか」

「田村小路がまずもろて双手をあげた」

「なんですって、——あの叔父が、まさか」

「まつさきに妙案だと云った、みんなびつくりしたがね」と米良は微笑した、「——とに

かく、来月の十日に第一回がある筈だよ」

三

平五はその寄合には出なかつた。出るとも云われなかつたし、興味もないからで、しかしその場のようすはときどき耳にした。父や兄が話すのを聞くこともあるし、聖坂で森助三郎から聞くこともある。——助三郎というのは森内膳の子で、平五とは従兄弟いとこに当り、年は二十二歳になる。学問がずばぬけてできるということだが、平五から見ると純粹にできingのではなく、虚栄心のために成績だけあげているという感じだった。それは彼の話しぶりや議論のやりかたでもわかるし、あまり頭のよくないような者を好んで嘲ちやうろう弄する態度にも、よくあらわれていた。

平五は月に三回か五回か、聖坂学問所の日講を聴きにゆく。助三郎とはそのときたまに会うのだが、呼びとめられない限り、こつちから話しかけるようなことはなかつた。三月に二回めの十日会があつたあと、平五は助三郎に呼びとめられ、新庄の叔父が恥をかけた話を聞かされた。叔父は家伝の品だと云つて、妙な香炉を持ちだしたという。それはあら

ためて見るまでもなく、ごくぎつな仏壇用の品で、しかし叔父は「五代前から新庄家に伝わっているそうだ」と注を加えたため、みんなが笑いだしたということであった。

「しゃれてるじゃありませんか」と助三郎は喉のどで笑った、「みんなにはわからないだな、新庄さんはなかなか茶人ですよ、そう思いませんか」

平五はその帰りに榎坂へまわった。米良平左衛門もそのとおりだと云った。

「とぼけているのか本気なのかよくわからないがね、おそらくとぼけているんだろうと思うが」

「あの叔父にとぼけるなんて芸ができるもんですか」と云って平五は溜息ためいきをつき、首を左右に振った、「しようのない人だ」

「そうだ、話は違うが、一つ聞いておきたいことがある」と米良は顔をあげて云った、「くから聞いたんだが、平さんの預ける金が、かぞえてみたら二十両を越したというんだがね」

「ええ、八十三分になった筈です」

「なんだい八十三分とは」

「両なんていうと角かじが立つから、すべて分でかぞえることにしているんです、しかしそれ

がどうしたんですか」

「へえ」と米良が云った、「両なんていうと角が立つかね」

「なにしろ部屋住の身の上ですからね」

「それなんだ、その部屋住の平さんが、三両や五両ならともかく、二、いや八十三分という金を溜めたとなると、預かっているこつちの責任も重くなる、どういう性質の金かということをいちおう聞いておきたいと思うんだ」

「話さなかつたかな」と平五は首をかしげた、「姉さんに話しませんでしたかね」

「あたしは聞きませんよ」とくにか云った。

「米良さんは」と平五が急に問いかけた、「私が養子の縁談をどうして断わるかわかりますか」

平左衛門はゆつくりと頭を振った。

「つまり」と平五が云った、「つまり養子にゆきたくないからです」

「それはそうだろう」

くにかがふきだした。

「そうじゃないんですよ、いや、ゆきたくないという気持には理由があるんです」と平五

は云い直した、「新庄の叔父、木下へいった杵さん、ほかに友達で二人いますが、みんなそれは哀れなものですよ」

平五は養子の哀れさを並べた。細さいを穿うがつとといったような詳しきで、米良夫妻はいささかおどろいたようであった。

「なるほどね」と米良が云った、「正月のときに杵さんをやりこめていたが、ふーん、なるほど切実な問題なんだな」

「依田さんはそんなことはないわ」とくには反対した、「新庄さんや木下さんや、ほかの方たちのことは知らないけれど、依田さんに限ってそんなことはありませんよ」

依田というのは、米良夫妻がすすめた婿養子のくちで、いちど平五は会ったことがある。父親はやつぱり婿だそうで、会ったのは母と娘だった。娘の年は十七。母親に似て軀からだつきは小柄であるが、縹緖ひょうじもかなりいいし、しとやかで、いつも眼に微笑を湛たえているという感じだった。婿養子にどうかと云われたのは、母娘に会ったあとの話で、先方はひどく乗り気だと聞いたが、平五はきつぱり断ことわったのであった。

「姉さんはそう云いますがね、杵さんの相手だつて結婚するまえはよかつたんですよ」と平五が云った、「それが子を一人産むとすっかり変つてしまった、二人の友達のほうも似

たりよつたりです、結婚するまえはしとやかに楚々そそとしていて、それが祝言してしまえばがらつと変るんですからね、小糠こぬか三合持さんごうぢつたらという俗言は決して誇張じゃありませんよ」「それならそれでいいけれど、ではいったいどうするつもりなの、一生部屋住でくらすつもりなんですか」

「だから金を溜めてるんです」と云つて彼は米良を見た、「五十両あれば御家人ごけにんの株が買えますからね」

平左衛門はちよつと黙つていて、それから静かに、「それは深謀遠慮だな」と云つた。

「いろいろ当つてみると、五十両あれば買えそうなんです」と平五は云つた、「侍の値打もさがつたものですが、町人だとまた話は違うんですね、こつちが侍ならそのくらいでも相談になるらしいんですよ」

米良はふーんといい、それから、不審な点を思ひだしたように、それにしてもこれだけの金をよく溜めたなと云つた。

「よく溜めたといつたところでまだ半分にも足りませんが、これには涙ぐましい話があるんですよ」と平五は云つた、「ほかの者には云えないが、聞いてくれますか」

「自分で涙ぐましいって云つてれば世話はないわ」とくにか云つた。

「後学のために聞きましょう」と米良は云った。

「恥からさきに話しますが、いちばん初めは七つの年です」と平五は続けた、「そのとき新庄の叔父は三十で、まだ木挽町に部屋住でいました、そして、もうそんな年では生涯ひやめしを食うことになるだろう、とまわりの者も云うし、自分でも諦めていたんでしよう。私はそれを見ていて、子供ごろにも深刻に考えたんですね、こうしてはいられないと思つたことをいまでも覚えていますよ」

そして、ひたむきに金を溜めようと決心した。金を溜めてどうするという目的はなかった、金さえ持つていればという、漠然たる気持だったが、彼はむきになって実行した。

「ここが恥ずかしいところなんです、小遣を溜めるだけでなく、そんな年で私は稼ぐふうをしたんです」と平五は片手で自分の頬を擦った、こす「どうしたかわかりますか」

米良は黙つて首を振つた。

四

「初めは菓子ですよ」と平五は続けた、「午後のおやつに菓子を貰うんですが、露月の饅

頭が五文だとすると、それを用人とか、侍長屋の子持ちのやつなどに、三文くらいで売
らんです」

「まあ呆れた^{あき}」とくにが眼をみはった、「まあおどろいた、そんな小さいくせにそんな悪
知恵をはたらかせたの、あたしはとても本当とは思えないわ」

「その次は古い肌着でした」と平五は構わずに云った、「肌着だの古足袋だの、もちろん
兄たちのおさがりですから、母だつてそんなものを気にしやあしません、纏めて^{まと}おいて屑
屋^{ずや}へ払うんですが、その中からいくらかましなのを抜いておいて売るんです、侍長屋の人
間や小者たちは結構よろこんで買いましたよ」

くには暢気な性分であるが、弟の告白にはよほどこたえたらしく、しきりに「なさけな
い」とか、「外間が悪い」とか、「こんなことつてあるかしら」などと云つて嘆息した。

「しかし」と米良は微笑しながら訊いた、「よくそれが御両親に知れずに済んだものだな」
「知れなかったのは当然ですよ、だつて私からそんな物を買ったなどということがわかれ
ば、どんな罰をくうかもしれないでしょう、とにかくこつちはまだ頑是^{がんぜ}ない子供なんです
から」

「さぞ頑是なかつたことでしょうよ」

「おまえがここで怒つてもしょうがないさ」と米良は妻に云った、「酒の支度でもしないか」

くが立つてゆくと、米良はあとを促すように「それから」と云つて平五を見た。

「十二くらいまでそんなことを続け、それからおやじの骨董好きに眼をつけました」と平五は話を継いだ、「十三か十四になつていたと思うんですよ、道具屋がうちへ出入りするようになつたのは祖父が亡くなつてからですが、その以前から松十や大庄だいしょうなどへかけていって、よくつまらない物を買わされて来ていました」

松十は京橋弥左衛門町、大庄は日本橋福島町にあり、道具屋としては二流どころらしいが、玄蕃はそういう店こそ掘出し物があるのだと、あたまから信じこんでいた。こちらが七千二百石の旗本だからだが、相手もばかげてあこぎなことはしないようだが、客のほうで掘出し物を覗ねらい、いっばし眼がきいたつもりでいるため、道具屋のほうに悪意がなくとも、三度に一度はとんでもない物をみずから背負いこんで来る。そんなときにはやがて眼ちがいということがわかるし、そうすると眼ちがいをしたことを隠すために、その「とんでもない物」は戸納とだなの中へ放りこんでしまふ。これらはたいていそのまま忘れられ、屑屋に払い物をするときなど、いっしょに纏めて二束三文ということになるのであつた。

「私はそれを抜いて売ったんです」と平五は済まなそうに云った、「払い物の中からなにか抜くときに思いついたわけです、屑屋はほかのがらくたどこみで二束三文だが、道具屋なら幾らかになるかもしれない、とにかく、たとえ眼ちがいにもせよおやじが掘出して来た物なんですからね」

「それは御当人も知っていたらうがね」

「おやじですか、とんでもない」と平五は首を振った、「自分の眼ちがいを認めるなんておやじの虚栄心がゆるしやしません、戸納へ放りこむなり忘れてしまおうし、二度とふたたび思いだしさえもしなかつたでしょう」

払い物の中から抜くときには、むろんいちおう断わった。そうして道具屋へ持っていったのであるが、ちゃんとした店ではまるで手にしない。てまえどもではこういう品は扱わないとか、よそへ当ってみるとか、おからかいになつてはいけない、などと云うだけである。そこで屑屋同然の古道具屋を捜した結果、越中堀に近い稲葉町で、一軒なじみの店ができた。——それは狭い横丁にあり、九尺間口で、奥は四帖半が一と間しかない。表の庇ひさしの上に清鑑堂という額が掲げてあるが、「堂」などというのはおこがましいはなしで、店に並べてある物を見ると、こつちが恥ずかしくなるくらいであった。

「こいつとすっかりうまが合いました」と平五は云った、「いちど木挽町のうちを見せたいんですよ、そして品物のいわれもうちあげたところ、清兵衛は清兵衛なりに欲を出したんでしよう、ことによると掘出し物にぶつつかるぞと思つたようですよ、……なぜ笑うんですか」

「笑つたわけじゃあない」と米良は口のまわりを撫なでた、「まあ、あとを聞こう」

「酒が来たようですよ」

くにと召使とで食膳をはこんで来た。平五は飲まないから、米良だけ盃さかずきを持ち、妻の酌でゆつくりと飲みだした。清鑑堂とのつきあいはほぼ十年に及んでいる、と平五は話し続けた。そのあいだに、清兵衛は幾たびか大きく儲もつけた。玄蕃が眼ちがいで買つた物の中から、或るときは市で、また或るときは同業なかまで吃びつくり驚するほど高値に売れる品があつた。面白いことには、それがその品の正しい値段ではなく、一種の（たとえば玄蕃のような）客に向けるのに適しているためか、現にそういう客から注文されているらしい、ということであつた。

米良が聞いていて云つた、「それをまた木挽町が買つたなんて云やあしまいね」

「これはまじめな話ですよ」と云つて平五はぬるくなつた茶を啜すすつた、「そうやっている

うちに、私はさらに新しい方法をみつけました、おやじの品が続かなくなったからでもあるが、清鑑堂の店にあるがらくたの中から、これとおぼしき物を買って、よその店の古道具屋へ売るんです、もちろんはじめはむだ骨折りでしたが、やっているうちに勘がはたらくようになったのでしよう、中でも刀剣類ではときたまかなりな儲けがあるようになりました」そこで彼はすばやく姉に云った、「まあなさけない、でしよう、わかっていますよ」

「それは幾つぐらいのときかね」と米良が訊いた。

「十六七のころからでしようね」

「よく誰にもみつからなかったものだな」

「みつかったんですよ、いや、金のほうですがね」と平五は肩をすくめた、「ちようど二十一分溜まったときにみつかったんです、紙に包んで長押ながしの中へ隠しといたんですが、おふくろがそれをみつけて取上げてしまいました」

「取上げられたって」

「まさか自分で稼いだとは云えやしません、小遣や人に貰ったのを溜めておいたのだと云ったんですが、そんなことは侍の子に似合わしくない、必要なときにはこっちからあげると云いますね、くやしかったですよ、じつにくやしかった、涙が止らなかつたですよ」

「二十一分となるとね」と米良が云った、「二十一というと、うう、五両一分か」

「それからあたしに預けるようになったのね」とくにが云った。

「貴女が輿入れこしをしてまもなくでしたね」と平五が云った、「とにかくここよりほかに信用できるうちはないんですから」

「わかったらあたしが怒られるだけよ」

「姉さんが云わない限り大丈夫ですよ」

「すると」と米良が云った、「この七年ばかりのうちに二十両以上も稼いだんだな」

「おそくともあと五年、三十までには予定額にするつもりです、自分ではあと三年と思ってるんですが」

米良が「切実だな」と云ったとき、若い家士が来て客だと告げた、「木挽町の敬二郎さまです」

平五が反射的に膝ひざを立てた、「そいつはいけねえ、私は退却します」

「しますかね」と米良は笑いながら家士に云った、「客間へとおつてもらつてくれ」
「履物をまわしてあげるわ」と云つてくにかが立ちあがった。

五 彼に対する清鑑堂の評

清鑑堂のあるじ清兵衛は云った。

「小出さまの若旦那にはもう七八年ごひいきになっています、ええ、たいした方ですな、お侍にしておくのは惜しい方ですよ、大旦那が道具にかけては玄人はだしだそう、いいえお世辞じゃあない、日本橋の大庄さんと弥左衛門町の松十さんがお出入りでしょう、お噂うわさは市いちなどでもよくうかがってます、つまりその血をひいてらっしゃるんですな、私の店などはごらんのとおりに半端物をつくねたようなありさまですが、なにしろこのがらくたの中から、若旦那がこれとにらんだ物は必ず値が付くんですから、そんなことが幾たびあつたかしれやしません、だもんですから私はお侍なんかやめなさいって云うんです、御三男の末っ子だそうですから、いつそ大小を捨てて裏の細江さんのお嬢さんを貰って、道具屋を始めたらどうですって、そのほうが気楽でもあり、きつとひとしんしょうおこしますぜって、よくそう云ってあげるんです、ええ、ああ細江さんですか、それは一つ向う路次の長屋にいる御浪人で、御主人は三年まえに亡くなり、いまはその御妻女と、みのと仰しやるお嬢さんとお二人ぐらしです、この店へは御主人の病ちゆうから、お嬢さんが物を売

りにいらつしやるので存じあげているんですが、なにしろお武家育ちだから、内職をして
もなかなか賄えないんでしょう、いまでもちよくちよくおみえになります、初めはかなり
いい品も頂きました、ええ、儲けさせて頂いたこともありますが、ちかごろはもうさつぱ
りです、お腰の物などもやむなく頂きましたが、そのその、隅のところほこりに埃をかぶつて
いる始末で、市へ持つてゆく気にもなりません、さようです、そのお嬢さんのことは小出
の若旦那も御存じですよ、この店で幾たびか顔が合ったわけで、色には出さないがお互い
に気をひかれているようすです、お嬢さんはたしか十八で、若旦那とは六つ違いなんです
から、年廻りもちょうどいいんですが、いいえだめです、若旦那は侍で一家を立てるつ
もりだそうで、町人になる気なんぞこれっぽちもありやしません、本当に惜しいもんで
す、あれだけのめききを活かさないなんてもったいないみたようなもんですよ、ええ、十
日ばかりおみえになりませんが、今日あたりいらつしやるんじゃないかと思えます」

六

米良でうちあげばなしをしたことを、平五はすぐに後悔した。米良は大丈夫だが、姉は

わからない。その二番めの姉だけは、きょうだいじゅうでいちばん親しかったし、いつも自分の味方になってくれていたが、いまは米良家の人間であるし、なにより良人が大事である。嫁して七年、まだ子に恵まれないのをつねづねひじめに感じているらしく、しばしば実家へ母を訪ねて来るから、どんなきっかけで口をすべらさないとも限らない。

「どうしてあんなことを饒舌しゃべつたらう」と彼は自分に舌打ちをした、「今年は正月からおかしなぐあいだ、よつほど気をつけないとなにが起こるかわからないぞ」

こんど米良へいったら、よく姉に口止めをしておこう、と平五は思った。

四月、五月、六月と、無事に日が経っていった。木挽町では兄の敬二郎に三番めの子が生れ、神谷町の木下では女のふた児が生れた。平河町の森で、六月下旬に老母が亡くなったが、木挽町から看病にいった母のいつ女が、実母の死にまいったものか、葬儀の日びょうがに倒れたまま、七月いっぱい森家で病臥した。その三十余日のあいだ、平五は毎日いちど平河町までみまいにかよった。ただみまいにゆくだけではない、菓子とかくだものとか、兄嫁の作ったたべ物などを持たされるので、ちようど残暑にかかる暑いさかりだったし、木挽町と平河町を毎日往復するだけでも相当こたえたが、それでも三日にいちどは、たいてい越中堀の清鑑堂へまわった。あるじの清兵衛は午後はたいてい店にいるが、留守のと

きでも女房を相手に、店の品をあさったり、むだ話をしたりして帰る。清兵衛夫妻はそれを仔細しさいありとみていた。つまり平五がそんなふうに来て時間つぶしをするのは、細江の娘が来はしないかと待っているのに相違ない、というのである。

「もちろん嫌いじゃあないさ」と平五は正直に答える、「しかし嫁に貰えないのにじたばたしたつてしようがないじゃないか」

「どうしてお約束だけでもなさらないんです、お嬢さんのほうでも貴方を好いてらっしゃることは御承知でしょう」

「ばかなことを云うな」と平五はちよつと赤くなる、「おれが家を出て一家を立てるにはまだ相当ときがかかる、三年かかるか五年かかるかわからない、そんな状態で婚約などできるもんじやないさ、こつちはいいが向うはおばあさんになってしまふ」

「だから思いきつて道具屋におんなさいつていうんですよ」

「その話はよせ」と平五はにべもなく頭を振る、「侍には侍の血があるんだ、仮におれが道具屋になりたいと思つても、先祖から伝わっている侍の血がゆるしはしない、おれにはそれがわかつているんだ」

「そういうもんですかな、こわいみたようなもんですな」

「おいもうあの娘のことは話さないでくれ」

八月になって、母が木挽町の家へ帰った。

その月の十日の会のあとで、来月は家蔵の刀剣を持ち寄ることになった、ということを知り、平五は聞いた。すぐ考えたのは新庄の叔父のことで、彼は田村小路の家を訪ねてみた。叔父は四十七歳で子供が七人ある、三十過ぎての結婚だから、長男がようやく十五歳で、末の娘はまだ二歳にならない。それに家付きの妻女と、妻女の老母がいるので、狭い家の中はいつも鶏小舎とりこやのように賑やかだった。

平五は叔父の居間で話したが、その部屋は三帖で、板塀に鼻のつか間えそうな庭があり、瘦やせた青木が萎しおれた葉を垂れているという、いかにも暑くうらぶれたけしきであった。話は簡単に済み、平五は四半刻とぎそこそこで帰ったが、その僅かな時間にも、子供たちが居間へ出入りしたり、喧嘩をする走りまわるで、まったくおちつく暇がなかった。

主殿は平五を送りだしながら、例によってねだり顔をみせた。いつもひどい貧乏なので、この甥おいを見ると（必要のないときでも）なにかねだりたいような気分になるらしい。夕方を訪ねたときはたいい食事にさそうのだが、まだひるまのことだから、平五は気づかないふりをし別れを告げた。

「刀とくればお手のものだ」と平五は歩きながら呟いた。

「ここでいちばん叔父の面目を立ててやろう、おやじは刀のことはわからないし、集まる連中はめくらばかりなんだから、いまに眼を剥かせてやるからみていろ」

彼は越中堀の清鑑堂へまわった。

横丁へ曲つて、その前まで来ると、店の中にあの娘がいた。細江みのという娘である。洗いざらした単衣ひしえに古い帯をしめ、継ぎの当った足袋をはいている。狭い店の上りがまち框へ、横坐りに腰を掛けているので、細いしなやかな腰の線がおどろくほど女らしいいろけをあらわしていた。膚は少し浅黒く、ひき緊つていて、眼と口が小さい。その小さな眼と口とに、平五は抵抗できないほど惹きつけられる。初めてその店で見かけたときからずっと、いつ会つてもその小さな眼と口つきとは、つよく深く彼をとらえるのであった。

なんとなくはいりそびれて、平五が通り過ぎようとする、店の中から清兵衛が呼びかけた。

「小出さまどうなさいました、お寄りにならないんですか」

平五は立停り、それから不決断に店へはいつていった。娘はさつと腰をあげ、伏眼になつて会釈しながら、脇へよけた。

「どうぞ」と平五は会釈を返した、「どうぞ用を済ませて下さい、私は通りがかりに寄っただけですから」

「有難うございます」と娘は答えた、低くて細い声だが、はっきりしていた、「わたくしもいま用が済んだところでございますの、どうぞ」

掛けてくれというような身ぶりをした。清兵衛は錢箱をあけ、なにがしかを紙の上へ取り出していた。

「きびしい残暑ですね」と平五が云った。

娘が「はい」と答え、それから暫くして平五がまた云った。

「ひと雨ほしいですね」

「はい」と娘が答えた。

「ああ」と急に平五が云った、「失礼しました、私は小出平五という者です」

娘は黙って低頭した。

「お待ちせ申しました」と云いながら、清兵衛が紙にのせた錢を娘に渡した、「どうかお勘定なすって下さい」

娘は受取ってよくかぞえ、その紙で包んで袂たもとへ入れた。そして清兵衛と平五とに会釈を

し、静かに店から出ていった。平五は上り框へ腰を掛け、清兵衛が奥へ、「茶を持って来い」と命じながらくすくす笑った。

「どうなすつたんです」と清兵衛が笑いながら云った、「三年もまえにもう名のつていらつしやるじやありませんか、お忘れになったんですか」

七

「そうだったかな」と平五はとぼけた、「そんなことはどつちでもいい、今日は頼みがあつて来たんだ」

とぼけたけれども事實はそのとおりで、ずっとまえにいちど名のつたことがあり、そのとき娘の名も聞いたのであるが、話のつぎほに窮して、つい、まだ名のらなかつたような気がしたのであつた。

清兵衛は平五の頼みを承知し、さつそく心当りを捜してみようと云い、それからふと思いついたようすで、脇に置いてあつた白鞆しらさやの短刀を示した。

「これはどうでしょう、いま細江さまから頂いたばかりですが」

「おまえ二分二朱しか払わなかったぞ」

「二分二朱でも泣きたいくらいですよ」と清兵衛が云った、「おふくろさまが腰を挫いた
それで、よっぽどお困りのようだったからやむを得ず買ったんです。まえに買った大小も
あそこにつくねたままですしね、しかし、この短刀は若旦那の御注文に合ってますよ」

「どういうんだ」

「貴方の御注文は古刀のにせものということでしょう、これは正宗だそうです」

「だめだ」と平五は首を振った、「いくら友人でも正宗はだめだ」

「でしような」と清兵衛は太息をついた、「ようございます、捜してみますから二三日し
たら来てみて下さい」

それから下旬まで待った。五六たびも清鑑堂へかよい、二三本みせられたが、思わしい
ものはなかった。寄合の連中をびつくりさせ、叔父の面目を立ててやるのが目的だから、
ありきたりの品では効果がない。どうしても名のとおった古刀の贋作で、素人の眼には
真偽の判断のつきにくいものが欲しかった。だが、月の終りになると清兵衛は手をあげた。
「もうだめです」と清兵衛は云った、「だいたい私に刀のことなんか役違いなんで、初め
っから無理なはなしだったんですよ」そしてまた、細江から買った短刀を取りあげてみせ

た、「いかがですかこれは、いちど見るだけでも見ませんか」

平五は受取つて、ちよつと抜いてみたが、すぐに首を振りながらそこへ置いた。

「その、——」と平五が云つた、「まえに細江さんから買ったというのを見せてくれ」

清兵衛は立つて、店いっぱいのがらくたの中から、その大小を取り出し、布で埃を拭いて平五に渡した。平五は脇差を見、次に刀を見た。どっちもうまくない、備前物のようであるが、すがたに品がなかつた。

「値打は^{こしら}拵えだけです」と清兵衛が云つた、「鞆もまだ使えるし、^{こうがい}笄と目貫が幾らかになるでしょう。もうばらして売つちまおうと思つているんですが」

平五がふいに「ちよつと」と云つて、刀をそこへ置き、まえの短刀を取つた。こんどは鞆をはらつて入念にうち返しを眺め、それから目釘を抜いて中心を^{なかご}しらべた。

「どうなさいました」と清兵衛が訊いた。

平五は黙つて刃を見、中心を見た。

「これは焼身だな」と平五は呟いた、「たしかに火で焼けたものだ、焼直しに相違ないが、地鉄も刃もすっかりしている、研いでみないとわからないが、刃文のあんばいだと相州の古刀に似ている」

「まさか、本物じゃあないでしょうね」

「まさかね」と平五は苦笑した、「しかし相州物の古刀に似ていることはたしかだ、うん、ことによるとこいつでいけるかもしれないぞ」

「すると、正宗ということに」

「それはむりだが、貞宗か義広だな」平五は云った、「銘のないのは修業ちゆうの作だとすればいい、この刃のぼうとうるんだところや、刃文のおおらかさは古刀の風をよく写している、よし、伝貞宗とおどかしてやろう」

「引取って下さるんですか」

「三分で買おう」

「それはあんまりですよ、現に二分二朱で買ったのを御存じじやありませんか、お役に立つんなら少しは儲けさして下さい」

平五は首を振った。これは値で買うのではない、寄合に出してめくら共をびっくりさせるだけだし、あとは用がないのだから、三分でいやならやめるばかりだ、と平五は云った。清兵衛はねばった。細江から買う物はたいていねかしたままで、いつも、女房にがみがみ云われるが、あの母娘が気の毒だからつい買わずにはいられなくなる。若旦那もまんざら

知らない相手ではなし、こんなときくらい少しは助力してくれてもいい筈である。そんなふうに清兵衛はくどいた。

「おかしな理屈があるもんだな」と平五は笑って云った、「ではもう二朱出そう、三分二朱、それでいやならごめんだ」

「若旦那は渋すぎるよ」と清兵衛は禿げかかった頭を搔いた、「まったくお待には惜しい、玄人はだしですよ」

明くる日、平五はその短刀を田村小路へ届けた。研ぎに出そうかと思つたが、そのままのほうが無事だと考え直し、叔父に向つてよく説明した。

「この地鉄の艶つや、刃文の豪放さと、小乱れのまじっているぐあい、これが相州物の古刀によくみる味です」平五は刃文を仔細に示して云った、「身幅のわりに重ねが薄いのは研ぎ減りでしょう、いちど火をかぶつて焼直したものらしい、それでこの中心なかごがただれているんです、ただれてはいるが、この中心のぎくつとした品のよき、これは新刀にはない味ですから、ここのとこをよく見るように云つて下さい」

「私にはよくわからないが」と主殿はおちつかない顔つきで云った、「貞宗だなどと云つていいだろうか」

「貞宗として伝わっていると云えばいいんです、そしていま説明した要点をうまく並べれば、みんなめくらだからわかりやしない、きつと連中びっくりしますよ」

「しかし、もしも偽物だとわかつたら」

「わかつたつて貴方の責任じゃあない、新庄家伝来なんですからね、大名の家蔵にだつて偽物は幾らもあるし、そんな心配をする必要はありませんよ」

「やってみるか」と主殿は云つた、「ではひとつ、やってみるとしよう」

平五は少しも心配しなかつた。

——必ずみんなひつかかる。

彼はそう信じていた。七年あまりも道具屋に出入りをし、焼物ではしばしば儲けた。これは骨董道楽の父のおかげもあるだろう、けれども刀剣類に関しては、平五自身の勘がものをいった。もちろん鑑定をするなどというところまではいかない、楽しみに見る程度であるが、父や親族たちに比べれば、はるかに眼が高いという自信があつた。

——ただ叔父がへまなことをしなければいい。いつかの香炉のときとは条件が違うが、小さな叔父のことだから、うっかりすると自分でぼろを出すおそれがある。それさえなければ大丈夫だ、と平五は思つていた。

九月十日に、彼は聖坂へでかけた。寄合のようすを見てやろうかと思つたが、さすがに気が咎めるので、日講の日ではなかつたがでかけてゆき、学問所の講堂を覗いたあと、学寮へいつて友人たちと雑談していると、森の助三郎がやつて来て声をかけた。

「どうしてうちにいないんです」と助三郎は陽気に云つた、「今日はおやじといつしよに本阿弥がいったんですよ」

八

平五はまじまじと相手を見た。すぐにはその意味がわからなかつたのである。助三郎はこつちへ来て、平五が刀剣に興味をもっているなら、今日の会には出席すべきであつた、どうしてこんなところへ来ているのか、と云つた。

「本阿弥がどうしたつて」と平五が訊き返した。

「本阿弥といつても京の多賀だ」と助三郎が答えた、「多賀の勘右衛門という人で、四五日まえから逗留とうりゆうしているんだが、今日の会は刀を持ち寄るのだと聞いたものだから、ぜひ拝見したいと云つてさ」

「いったのか」と平五がつかみかかるように訊いた、「その人が木挽町へいったのか」
「いったよ、よせばいいのにさ、ろくな刀が集まるわけじゃなし、よせばいいのにおやじはよろこんで伴つれていったよ」

平五は唸うなった。

「どうしたんだ」と助三郎が云った、「どうかしたのかい」

「よけいなおせっかいだ」と云いながら平五は立ちあがった、「くそうくらえ」

「なんだって」と助三郎が聞き咎めた。

「こつちのことだ」

「おい」と助三郎が前へ立塞たちふさがった、「いまの言葉を取消せ」

「こつちのことだと云つたらう」

「取消さないのか」

助三郎は拳こぶしをにぎった。

「おせっかいと云つたのはおれ自身のことなんだ、自分に云つたことを取消すのか」

「そうじゃない、くそうくらえと云つた、それを取消せというんだ」

平五は助三郎を見て、そして云つた、「ああそうか、じゃあそんなものはくらうな」

助三郎がなおなにか云いかけたが、平五は友人に別れを告げて、学寮をとびだした。

「これはひどい、こいつはひどい」と平五は呟いた、「多賀などという本職が来るとはあんまりだ、まるでべてんじやないか、どうするんだ」

彼は練堀ねりべいの木戸門をぬけ、馬場に沿って聖坂へ出た。

平河町が初めに「多賀だ」と紹介すればいい。そうすれば叔父も短刀は出さないだろうが、いや、多賀だけではだめだ。本阿弥と多賀との関係など叔父は知っていない。おそらく紹介されても短刀を出すだろう。

——これは新庄家伝来で、貞宗作ということです。

そんなふう云う叔父の姿が見えるようである。そうして、刃文や中心の説明までするだろうと思うと、平五は全身がちぢむように感じ、歩きながら幾たびも唸り声をあげた。

「おやじやほかの連中はごまかせるが、本職の眼をごまかすことはできない」と平五は呟いた、「叔父は恥をかくことだろう、よけいなおせっかいだった、叔父の面目を立てるところか、満座の中で恥をかかせることになった、ひどいもんだ、ひどいことになったもんだ」

彼は自分を罵った。自分の軽薄さ。猿知恵のおせっかひ。うぬぼれと高慢。平五は頭を

垂れ、心の中でかぶとを脱いだ。

田村小路を訪ねたのは夕方であった。叔父はまだ帰っていないかった。妻女があがつて待つようにすすめたが、彼は用をたして来ると云い、半刻ばかり歩きまわってから、また訪ねた。主殿はちようど帰ったところで、風呂にはいつていると云われ、平五はいつもの三帖で待った。子供たちがうるさく騒ぎ、七つと五つの男の子は、はいつて来て平五をからかった。遊んでもらいたいのだろうが、こつちはそれどころではない、あいそを云う気も起こらないので黙っていた。

主殿が汗を拭きながらあらわれると、平五はいきなり低頭して詫わびを云った。

「本阿弥、いや、多賀が来るなんて予想もしなかったものですから、そう聞いて、しまつたと思つたんですが」と平五はうかがうように叔父を見た、「御迷惑をかけて済みません、やっぱり短刀は見せたのでしょうか」

「見せたよ」と主殿が答えた、「多賀という人が鑑定家とは知らなかったし、平河町もなにも云わないものだからね、鑑定家だと知っていたら見せはしなかつたらうが」

「こんなことになるとは夢にも思わなかつたんです、どうか堪忍して下さい」

「いやちがう、そうじゃないんだ」と主殿は手を振った、「そうじゃない、あやまる必要

なんかない、あれは本物だそうだよ」

平五は吃どもった、「なんですって」

「こういうわけなんだ」

主殿は汗を拭きながら語った。多賀勘右衛門はその短刀を二度見た。いちどはすつと見ただけだったが、他の刀を二三見たあとで、もういちど拝見したいと云った。二度目にはあらたまつた態度で、丹念にうち返し眺め、中心もよくしらべたうえ、「ふしぎだ」と幾たびも口の中で呟いた。それから、研ぎにかけてみなければはつきり断言はできないが、これは貞宗ではなく、新藤五か、ことによると正宗だと思う、と云った。

「無銘である点が、おそらく正宗だろうと思われ、と云われたのだ」と主殿はまた汗を拭いた、湯あがりの汗ではなく、そのときのことを思いだした汗のようである。「刃文のどこやらは新藤五にそっくりだが、すがたのぎっくりとしておおらかな味、しかも高い氣き魄はくのこもつているところは正宗の作に相違ないと思う、そうくり返して云って、ともかく自分の手で研いでみたいから預かってゆくといいこと、一座はしんとしてしまおうし、おかげで私はたいへん面目をほどこしたよ」

平五は睡をのんで反問した、「それは事実ですか、まさか私をからかつてるんじゃない

でしようね」

「うちへ帰ってみればわかるよ」と主殿が云った、「本職の鑑定家が、よもや眼ちがいをするわけもないだろう、おまえたいへんなものを掘り出したんだぞ」

「わかりませんよ、そんな筈はないと思う、もつとも私はまだ正宗を見たことはないが、しかし本当とは思えませんね、とても」と平五は昂奮こうふんを抑えきれずに云った、「仮にもし事実だとすると、あれは元の持主に返すか、相当の金を払わなければならない、仮に事実だとすればですよ」

「だってあれは平五が買ったんだろう」

「元の持主がわかつてますからね」と平五は云いながら立ちあがった、「とにかく多賀と
いう人に会ってたしかめてみます、まだ平河町にいるんでしようか」

「そうだろうよ、ざっと下地したじとぎ研をしてみても、二三日うちに返辞をすると云ってたからね」
「とにかく平河町へ行ってみます」

平五は叔父の家をとびだした。聖坂の学寮からとびだしたときよりずっと勢いがよかつたし、けしきばんでいた。いつもならそんな浪費はしないのだが、辻駕籠つしかごをひろい、駄賃をはずんでいそがせた。——平河町には多賀勘右衛門がいた。平五は森家の者には会わず、

家扶を玄関へ呼んでもらつて、じかに多賀と会いたい旨を述べた。家扶はいちど奥へゆき、すぐに戻つて来て、彼を庭のほうから数寄屋へ案内した。

九

勘右衛門は四十二三になる肥えた男で、顔も軀つきも遅たくましく、するどい眼をしていたが、京訛なまりの言葉が女性的なので、印象がひどくちぐはぐに感じられた。話は簡単に済み、平五は短刀を受取つて歸つた。

勘右衛門はまだ研いではいかなかったが、正宗に相違ないと云い、その理由を説明した。平五も正直に事情を話し、もし正宗の作だとすれば代価はどれくらいかと訊いた。勘右衛門は自分が折紙を付ければ金八十五枚だと答えた。焼身でなければ金百五十枚以下ではないが、焼直してあるからそのくらいだろうと答えた。そこで平五は、元の持主に割戻しをするとなれば、金額はどのくらいだろうかと訊いた。勘右衛門は笑つて、その必要はあるまいが、もし気が済まないのなら、二十金も遣つたらよかろうと答え、「しかしこれは木挽町が譲り受けることになつてゐる筈ですよ」と云つた。

平河町から帰る途中、平五はいろいろな思いに悩まされた。

父がねら覗っているというので短刀を持って帰った。多賀はぜひ研ぎあげてみたいと云ったが、そんなことをして父に取上げられてはおしまいである。父から譲れと云われれば、気の弱い叔父に断わることはできないだろう。それではとび鳶に油揚をさらわれるようなものだ。

「まるつきり鳶に油揚だ」と歩きながら彼は呟いた、「そううまくいったまるものか、冗談を云うなつてんだ」

細江にわけを話そう、と彼は思った。清鑑堂へ売りに来たとき、正宗だと娘は云ったそうである。そう伝わってはいしたが、母娘は（亡くなつた細江その人も）信じてはいなかったのだろう。さもなければ二分二朱などで売るわけではない。したがって本物だとわかつた以上、それを知らせるのはこちらの当然の義務である。

「だが、知らせてからが問題だ」それなら家宝として買い戻す、と云われたらどうするか。まさか金八十五枚くれとは云えない、こつちが清鑑堂から買った代価なら請求できるが、二分の銀にも困っているのだから、おそらく三分二朱の都合もたやすくはできまいし、金八十五枚とわかつているものを、みすみす三分二朱で手放すのは残念である。

「残念どころではない、それは殺生せつしようというものだ」と平五は呟いた、「これ売ればすぐにも御家人の株が買える、うちを出て独立することができるんだ。しかも、おれがみつけないければ、こいつ、清鑑堂の店の隅で、いつまでも埃をかぶっていたことだろう、つまり、要するに」

平五は屹きつとなり、額をあげて強く頭を振った。よくない考えが頭にうかんだのである。彼は心の中で、それは侍らしからぬ考えだ、単に人間としても恥ずべきことだぞ、と自分を叱った。けれども、いちど頭にうかんだ思案はなかなか承知しない。黙っていればわかりやしない、自分の鑑識で発見したものではないか、おまけに、それで長年の望みがかなうのだ、細江に知らせたところで、却かえつて事を面倒にするばかりだぞ、黙っている黙っている、という囁ささやきがしつこくつきまとった。

「えい」と彼は立停つて気合をかけた、「えい、この野郎すっかりしろ」

向うから来た通行人がぱつと脇へとびのいた。平五の叫びを聞いて吃驚したのだろう、こちらも驚いて、いそぎ足に歩きだした。

平五は三日間思い迷った。家を出ることは出るが、どうしても越中堀へ足が向かないのである。細江へゆけばきれいな口をきくだろう。必ずきれいな口をきいて、ことによると

短刀を無償で返すかもしれない。おそらくその誘惑に勝つことはできないだろう、おれはへんな自尊心がつよいからな、と彼は思った。そして三日めの夕方に、ふと解決する手段を一つみつけた。それは、短刀といっしょに娘を嫁にもらう、ということである。細江の家名は生れて来る子供のうち、誰か一人に立てさせればいい。小出の家はみな子が多いから、自分にも二人や三人は生れるだろう。もちろん娘といっしょに母親も引取る、この条件なら悪くはあるまい、と思った。

「ばかなはなしだ」と平五はにわかには晴ればれとした顔つきで呟いた、「あれほどあの娘が好きだったのに、どうしてそこに気がつかなかったのか——欲だな」と彼は眉をしかめた、「短刀が惜しいという欲が先になったんだ、あさましいもんだ」

明日は細江を訪ねよう。そう決心をして家へ帰ると、すぐ父に呼ばれた。告げに来たのは母で、お父さまがたいそう怒っているから、いったらすぐにあやまりなさい、と云う。なにを怒っているのかと訊いたら、なんでもいいから早く行ってあやまれ、と云うばかりであった。

父は居間で書きものをしていた。平五が坐るところへ向き直ったが、その顔を見ただけで、ひどく怒っていることがわかった。

「短刀をどうした」と玄蕃はいきなりどなった。

平五はまごつき、「なんですか」とそらを使おうとした。

「ごまかしてもだめだ、正宗の短刀を持っているだろう、ここへ持って来い」

「どうして、いや、どうなさるんですか」

「きさまなどの持つ品ではない、おれが預かるから持って来いというのだ」

平五は口ごもつて、云つた、「それはちよつと困ります、あれは新庄の叔父さんのものですし、それに」

「黙れ」と玄蕃はどなった、「きさまのしたことはすっかりわかっている。主殿がなにもかも話していったぞ、この、このしれ者、きさま呆れ返つたしれ者だぞ、いいからまず短刀を持って来い」

平五は黙っていた。

「きさまが持っていることに紛れはない」と玄蕃はなお云つた、「おれは研ぎの結果が知りたいから平河町へいった、すると新庄へ返したというので主殿を呼んだのだ。主殿はすっかり話をして、持ち帰つたのはきさまだろうと云つた、それに相違ないだろう」

平五は怒りのために胸が熱くなった。

——なんといなさけない人だ。

ほかの者ならとにかく、新庄の叔父がしゃべるといふ法はない、それだけは叔父はしてはならない筈だ。なんといなさけない腰ぬけだろう、まるで女の腐ったような人じゃないか、平五は齒がみをした。

「きさま聞いているのか」と玄蕃はどなっていた、「持つて来いと云つたら持つて来い、さもないと量見があるぞ」

平五は父を見た、「量見とはなんですか」

「口答えをするか」

「量見があるとはどういうことですか」

「おれは短刀を持つて来いと」

「いやです」と平五は父を遮つて云つた、「叔父さんが話したのなら御承知でしょう、あれは私がつけて私が買ったものです、たとえば父上の申しつけでも、私は絶対に手放すことはできません、お断わりします」

「云つたな、こいつ、絶対にと云つたな」

「念には及びません、申しました」と平五は挑みかかるように云つた、「さあ、うかがい

ましよう。量見があるとはどういうことですか」

「勘当だ」と玄蕃が云った、「きさまはたつたいま勘当だ」

「理由を仰おつしやつて下さい」

そこへ母が「平五さん」と云いながらはいつて来た。玄蕃はそれで却つて怒りの焰ほのおを煽あおられたように、口出しをするな、と声いっばいに喚きだした。

「理由が聞きたければ云つてやる。きさまは小出の家名を傷つけ、一族の面目に泥を塗るやつだ、おれはみんな知っている、きさまのして来たことはなにもかも知っているんだ、おれはめくらでもつんぼでもないんだぞ」

「私がなにをしました」

「平五さん」と母が云った。

「おまえは黙れ」と玄蕃は激しく妻をきめつけ、平五に向つて吃りながら云った、「きさまはこんな小さいじぶん、饅頭や菓子、三時に貰う菓子や饅頭を人に売つて銭にした、次には古い肌着や足袋などだ、七千二百石の旗本の家に生れ、まだ十歳にもならぬ小伴こせがれがだ、そうだろう」

「まあ、あなた」と母が喘あえいだ、「まさか、まさかそんなことが」

「おまえも悪い」と玄蕃は妻に云つた、「末っ子だと思つてあまやかして育てるからこんな人間ができたんだ、まさかどころか、それからあとは古道具屋のまねだ、こんなことは舌の汚れだから多くは云わぬが、こいつは屑屋のうわまえをはねたり、古道具屋のようなことをしていたんだ、いつかおまえがみつけて取上げた五両あまりの銀は、そんな汚らしいまねをして儲けたものだ」

「まあ平五さん」と母は泣き声をあげた。

「こんどの短刀もその伝だ」と玄蕃はふるえながら続けた、「主殿の話によると、きさまは二束三文の偽物を買つて、おれたちぜんたいを嘲ちやうろう弄するつもりだったという、——もうがまんが切れた、こんなやつはおれの子ではない、こんな人間をうちに置いては小出の家名に傷がつく、一族ぜんたいの名折れだ、たつたいま出てゆけ、勘当だ」

「わかりました」と平五が云つた、彼は蒼あおくなつていたが、言葉も態度もはつきりとおちついていた、「勘当と仰しやるなら出てゆきます、いや、お母さんは黙っていて下さい、出てゆくまえに一言だけ云いたいことがあるんです」

「なにを、きさまの云うことなど」

「一言だけです、聞くのが恐ろしくなかつたら聞いて下さい」と平五が云つた、「私は

父上の仰しやつたとおりのことをしました、饅頭から古道具屋のことまで、だいたいすべて本当です、しかしどうして私がそんなことをしたのか、いちどでも考えて下すつたことがありますか」

「きさまに武士の誇りがなく、侍だましいがなかったからだ」

「それだけですか」

「きさまが町人根性で、古道具屋などが性に合っていたからだ」と玄蕃が云つた、「いまになればどんな理由を付けることもできるだろう、しかしよく聞け、きさまがもし正当なことをしたのなら、決して弁解などはしない筈だぞ」

平五はあつという顔をした。まるで平手打ちでもくらつたように、あつという顔をして口をあき、それから唾をのんだ。

「わかりました」と平五は頷いた、「わかりました、ではべつのことを申します、いま父上はお母さんを責められた、末っ子だからあまやかして育てたつて、——これはものごころがついて以来、みんなから休みなしに云われたことです、敬二郎兄さんに云わせると、末っ子で三文安いうえにあまやかされたからおまけが付いてるんだそうです、冗談じゃありません、とんでもない、私は生れてこのかたいちどだつてあまやかされた覚えなんかあ

りませんよ、お母さんからしてそうです」と彼は母に向つて云つた、「たぶん忘れていらつしやるでしょうが、私がなにか頼もうとすると、まだなにも云わないうちに『いけません』とくる、お母さま私は、と云いかけるなり、なにも聞かずに『いけません』とくるんです、お母さんは忘れていらつしやるだろうけれど私はちゃんと覚えています、兄さんや姉さんたちは自由にねだるし、ねだつたことはたいてい許される、しかし私だけはすべていけません、いけませんで片付けられて来たんですよ」

「わたしは、あなたを」と母は袖で眼を押えながら、喉のどを詰らせた、「あなたが末っ子だから、あまやかしては悪いと思つて」

「お祖父さんやお祖母ばあさんもそうでした」と平五は続けた、「お祖父さんはお祖母さんが私をあまやかすと云うし、お祖母さんはお祖父さんがあまやかすと云う、そんなふうにもんで私があまやかされていると云いながら、誰一人あまやかしはしなかつた、いちども私をあまえさせてくれたことがありませんか、お母さん、そんな記憶がいちどもありませんか」

「わたしはただ」と母はまた云つた、「ただあなたをしつかり育てたいと思つて」

「そうです、そのとおりです」と平五はまた頷いた、「私はお母さんを責めているんじゃない

ありません、私は末っ子で三文安いかもしれないが、決してあまやかされたことはない、ということをおわかってもらえばいいんです、では失礼します」

十

平五は自分の部屋へ戻り、両刀を差し、短刀を持っただけで、内玄関から出ていった。母はそのあいだ付いて廻り、父にあやまれと泣いてくどいた。

家を出てどうする気だ、どうしようもないではないか、それともなにか当てでもあるのか、と訊いた。

「私は大丈夫です、どうか心配しないで下さい」と平五は云った、「父上の云うとおり、私は古道具屋が性に合ってるんでしょう、今夜はじめて決心しました、私は道具屋になります」

「まあ平五さん、なにを仰しやるの」

「おちついたらお母さんには知らせます、ではこれで、——」

母の呼ぶ声には構わず、平五は外へとびだした。宵の街をいそぎ足にゆきながら、彼は

首を振つたり舌打ちをしたり、また独り言を呟いたりした。彼は自分が云うべきことを云わなかつたことでくやしがり、また、云わずにがまんしたことを誇らしく思った。

「おやじのやついいことを云やあがつた」と彼は歩きながら呟いた、「あんな気のきいたことが云えるとは知らなかつた、あの一と言にはまいったな」

そうだ、弁解することはない。自分の立場を云いたて、おやじをやりこめたところでそれだけのはなしだ。おれのやつたことがおれにとつて正当だつたということは、事実のうゑで証拠だてればいい。

「一流の道具屋になつてやるぞ」と彼はいさまじげに呟いた、「侍だましいもくそもあるもんか、自分の力でそのみちの一流になれば、永代扶持えいたいふちで徒食しているよりよつぽど人間らしいや、へ、いまに証拠をみせてやるから吃驚びっくりするな」

平五はまず清鑑堂を訪ねた。

清兵衛は晩酌をしていたらしい。話を聞くと赤い顔をかがやかし、「やりましたか」と膝を叩いた。わが意を得たという口ぶりで、及ばずながら一切の世話をしよう、とにかくあがつて、祝いに一杯やつて下さい、とすすめた。平五はあとで来ると断わり、細江の住居を訊いた。清兵衛はまた膝を叩き、そうくるだろうと思つたと云つて、向う路次の木戸

からはいつて左の五軒めだと教えた。

「しかし今夜はよしたらどうです、こんな時刻にいつてする話じゃあないでしょう」

「いや、ほかにも用があるんだ」と平五は腰をあげながら云った、「ちよつといつてすぐ帰つて来る、帰つてから話すよ」

細江の住居はすぐにわかつた。

路次は狭くて暗かつた。長屋のそこ此処こゝこゝで煮炊きをする匂いや、泥溝どぶや、ごみ溜しげきの刺戟しげき的な匂いが漂つていて、平五は空腹を感じると同時に、胸がむかむかした。細江ではもう雨戸を閉めており、平五の声を聞いてもすぐには戸をあげなかつた。

「小出平五です」と彼はくり返した、「先日お売りになつた短刀のことで話があるので、清鑑堂へお売りになつた短刀です」

娘のものは母に訊いていたらしく、やがて迂すべりの悪い雨戸をあげて「どうぞ」と云つた。戸をあけると格子はなく、一尺ばかりの土間からすぐ二帖の上り框になっている。娘は行燈を脇に置いてきちんと坐り、作法どおりに挨拶をした。

「夜分にお邪魔をします」と平五は立つたまま云つた、「じつは先日のあの短刀が、五郎正宗の真作とわかつたものですから」

みのは疑わしげに眼をあげた。平五はあらましの事情を語った。奥に寝ているであろう母親にも聞えるように、かなり高い声で話すと、襖の向うから呼ぶ声ふすまがし、みのは返辞をしてそちらへいった。あがつてもらえ、と云うのが聞え、みのが当惑したように平五を見た。畳もやぶれているようなその二帖へ、あがれとは云いかねるのだろう、平五は「失礼します」と刀を腰から取って置き、襖の際へいつて坐った。

「細江しのぶでございます」と襖の向うで云った、「病中ですから失礼ですがこのままでおゆるし下さい」

平五もこちらから挨拶した。

「短刀のことはここですかがいました」としのぶは切り口上で云った、「正宗だと伝わっていたのが事実だとわかってうれしゅうございます、けれどもいちど手放した以上、こちらにはなんのかかわりもございません、どうぞ御心配なくおひきとり下さい」

切り口上のうえに、おどろくほど割りきった態度が感じられた。

——これは強敵らしいぞ。

平五はそう思いながら、みのを嫁に欲しいと云いだした。短刀の事がきっかけて勘当された始終と、自分が大小を捨てて道具屋になり、一流の商人になるつもりであること、み

のを娶ればもちろん母親も引取って世話をする事など、気があがっているために、話が前後したり、聞えたり吃つたりしながら、それでも云うだけのことはすっかり云った。しのぶは黙って聞いていたが、平五が話し終るとすぐに「不承知だ」と答えた。

「旧主の名は申せませんが、細江は七百五十石取りの筋目正しい家柄です、たとえ浪人をし、このように貧窮はしていても、道具屋などになる人のところへ娘を遣るわけにはまいりません、お断わり致します」

「しかし」と平五はわれ知らず云い返した、「家柄の点なら小出も三河以来の旗本です」「お家はそうでしょう、それだけの家に生れながらあなたは御勘当になった、つづめて申せば、あなたはもう三河以来のお家柄を口になさることはできない筈でしょう」

細江家はどうです、と平五は口まで出かかった。浪窮して男子がなければ、細江の家を再興する機会もまずあるまい。それなら家柄もくそもない、同じことじゃないか、そう云おうとしたのであるが、そのとき、脇のほうでかすかに嗚咽の聲がはじめ、見ると、みのが袂で顔を掩っていた。

「失礼致しました」と平五はようやく自分を抑えて云った、「私をお願いのしようが悪かったでしょう、この話はまた改めて申上げることになります」

「いいえお断わり致します」としのぶが云った、「そのお話ならもううかがう必要はございません、おいでになることもお断わり申します」

「失礼しました」と平五はものに云った。

刀を持つて外へ出、路次をぬけて通りへ出ると、平五は堀端へいつて立停った。

「あれが、——」と彼は荒い息をしながら呟いた、「あれがおやじの云う、侍だまいというやつなんだな、ひどいもんだ、まるで齒が立たなかつたじゃないか、今年はやつぱり厄年だぞ」

彼は急に振返った。うしろに人のけはいを感じたのであるが、振返ると、みのがこつちへ来るところだつた。平五のあとを追つてすぐに来たのだろう、そばまで来ると立寄り、また袂で顔を掩おほつてむせびあげた。追つては来たけれども、それ以上どうしようもない、口もきけないというようすである。平五にはそれで充分であつた。彼はすばやく道の左右へ眼をやり、（暗い堀端の道には人の影もなかつた）それからみなのそばへ寄つて、彼女の肩に手をかけた。

「私は忍耐にかけては自信があります」と平五は云つた、「私の父は貴女あなたのおかあさまよりもつと頑固のわからずやでしたが、とにかく二十四の今日まで私は辛抱しましたからね、

わかりますか」

みのは嗚咽しながら頷いた。

「道具屋でもいいでしょうね」と平五が云った。

みのはまた頷いた。彼は娘を抱きしめたい衝動に駆られた。彼の手の下で、娘の肩はあまりに弱よわしく、小さく、そして柔らかであり、彼はその肩を静かに押しやった。

「清鑑堂がお役に立つでしょう、もう帰って下さい」と平五は云った、「どうかおかあさまをお大事に」

十一 彼に対する米良の評

米良平左衛門は云った。

「依田の婿になるより、平五はやっぱりのほうがよかったようだな、細江の妻女が亡くなるまでに三年か、あしかけ四年がかりで結婚したわけだが、そのあいだにしようばいの手掛りもつき、店もちゃんと持つことができたんだから、却って結果としてはよかったと云つてもいいだろう、よく辛抱したものだ、つまり好きなみちだったからだろう、なにし

ろ饅頭からはじまっているんだからな、そう、『平五』という店の名は、なかまうちではもうかなり聞えたものになっていくそうだ、小出さんはあのとおりの道具好きだったが、『平五』の評判が高くなると、ぴったり骨董道楽をやめてしまった、おそらく、平五に舌でも出されるような気がしはじめたんだろうな、小出さんの話のようすがどうもそんな按^あ配^{んぱい}だったよ、あの父子のあいだでは、どうやら平五の勝ちらしい、いや、小出一族ひつくるめて、と云うほうがいいかもしれない、平五のやつ、とにかくやりとげたものさ」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二十八巻 ちいさこべ・落葉の隣り」新潮社

1982（昭和57）年10月25日発行

初出：「オール読物」文藝春秋新社

1957（昭和32）年10月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

末っ子

山本周五郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>